鼻腔粘膜ノ病理組織的知見補遺

特ニ之ニ發現スルルツセル氏小體ニ就テ

Y. Kinugawa: Pathologisch-histologische Untersuchungen der Nasenschleimhaut mit besonderer Berücksichtigung des Vorkommens von Russellschen Körperchen.

北海道帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室(主任香宗我部教授)

衣川 穰

序 說

材料及検査法

下 甲 介

中 甲 介

中 隔

下鼻道側壁

上 顎 竇

鼻 茸

組織的所見總攬

ルツセル氏小體ニ就テ

斷 案

結 語

附圖解説

文 献、附 圖

序 說

鼻腔ハ氣道ノ最上部ヲ占メ、常ニ外氣ト接觸シ寸時モ息ム事ハ無イ。如何ナル外氣ノ變動ト雖直チニ鼻腔粘膜ノ刺激トナルベク、茲ニ種々ナル病變ヲ容易ニ起スベキハ想像ニ難カラス。而シテ之ガ固有鼻腔タルト副鼻腔タルヲ問ハズ骨壁ニ圍繞セラレ、軟部ハ僅カニ之ニ附着スルノ程度ニ止リ、病變ヲ起スベキ範圍狹少ニ而モ剔出檢案ニ頗ル不便デアル、久シク研究的興味ノ此處ニ向ケラレザリシハ又故ナキニ非ズト云フ可キカ。一八九二年 Zuckerkandl ノ大業績出ヅルニ及ビ甫メテ闡明ノ域ニ近ヅキ、後我久保教授亦多大ノ知見ヲ加ヘラレ、相前後シテ數多ノ學徒ノ記述アリ、漸ク微ニ入り細ニ亘ツテ又剩ス所無キガ如クデアル。

余ハ曩ニ二三鼻粘膜ノ組織的研案ニ從事スベキ機會ヲ得、茲ニ稿ヲ起シタモノデアルガ、唯先覺ノ跡ヲ追ヒ、遺シタルヲ拾ヒ、洩レタルヲ補ハントスルニ他ナラスノデアル。

材料及検査法

余ノ所案ニ供シタル材料ハ大部分、我が教室ニ於テ手術ニ際シ得タルモノデアルガ、一部ハ東京泉橋慈善病院病理部ニ於テ屍體ヨリ採レリ、特ニ記シテ病理部長福士博士ノ御厚意ヲ感謝スル次第デアル。

甲介組織ハ全長ヲ檢スル事必要デアルガ便宜上、前三分ノ一ノ部ヲ、副鼻腔粘膜ハ主トシテ竇底ニ常ル部ヲ檢シタガ部位ノ明カナラザルモノハ病變ノ著シト思ハレル部ヲ、鼻中隔ハ方形軟骨部ヲ、下鼻道ハ上顎竇根治手術ニ際シ對孔製作ノ爲メ切除セラレタモノ、鼻茸ハ蓋ヨリ遊離尖端迄ヲ含ム、凡テ是等ノ材料ハ前額斷面トシテ裁切シタ、但シ下鼻道粘膜ノミハ水平斷面トシタ。

固定液トシテハ「フオルモール」及「無水アルコール」ヲ使用。骨組織ヲ具有スルモノハ五%硝酸液ニヨル脱灰ヲ行ツタ。「パラフィン」包埋法ニ依ル連續切片ヲ調製シテ主トシテ「ヘマトキシリンエオジン」染色ヲ行ヒ、尙「ワングーソン」氏法、「フィシャー」氏及「ウィンナ」・「テンツェル」氏彈力纖維染色法、沃皮綠染色、グラム氏法等種々ナル染色法ヲ併用シテ檢鏡ニ供シタノデアル。

下 甲 介

症例ノ各個ニ就テ記載スルハ繁雜ニ亘リ徒ラニ冗長ニ流レル憾ガアルノデ次ノ如ク簡約ニ表示スル事トシタ、以下各組織トモ之ニ倣フ事トスル。第一例ヨリ第九例迄ハ病死屍體ヨリ得タモノデ生前特ニ鼻疾ヲ有シナイモノデアル、第十例以下ハ肥厚性鼻炎ノ診斷ノ下ニ切除セラレタモノデアル。

第一 表

番号	姓名	年齢	肉眼的所見	上皮	基底膜	固有粘膜層	腺組織	血管系	浸潤	炎症細胞	ルツェル氏小體	備考
5	彦大	55	ク腺上皮膚間	肥著明ニ	アス、圓形細胞浸潤	シ粘液腺ノ數少	數大腫脹體多	クニ少シ	胞多シ	バ	認メラレ	纖維少シ
4	榮西	59	ク腺上皮膚間	肥著明ニ	アス、圓形細胞浸潤	シ粘液腺ノ數少	數大腫脹體多	クニ少シ	胞多シ	バ	認メラレ	纖維少シ
3	作田	48	ク腺上皮膚間	肥著明ニ	アス、圓形細胞浸潤	シ粘液腺ノ數少	數大腫脹體多	クニ少シ	胞多シ	バ	認メラレ	纖維少シ
2	萬橋	35	ク腺上皮膚間	肥著明ニ	アス、圓形細胞浸潤	シ粘液腺ノ數少	數大腫脹體多	クニ少シ	胞多シ	バ	認メラレ	纖維少シ
1	五今	21	ク腺上皮膚間	肥著明ニ	アス、圓形細胞浸潤	シ粘液腺ノ數少	數大腫脹體多	クニ少シ	胞多シ	バ	認メラレ	纖維少シ

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
藤 武	藤武	張尾	永徳	石流	口井	田栗	田柴	田米	谷長	四渡	昇小	モ松	奥殿
♂	♂	♂	♂	♂	♀	♂	♂	♂	♂	♂	♂	♀	♂
26	26	22	24	18	32	19	22	35	20	45	27	23	46
肥圓形大ニ	肥中等大度	肥巾廣厚ク	肥巾廣厚ク	肥輕度大ニ	ズシカラ	肥大著	前大ニ肥球	肥大著	肥分葉大狀	肥圓形大ニ	尋常大	尋常大	ス狀テ縮呈
皮膚毛上	ク	ク	皮膚柱上	圓柱上皮膚	柱狀面	下緣扁	ク	皮膚毛上	重層扁	皮膚毛上	腺及變性	皮膚毛上	皮膚柱上
ズメラレ	菲薄	肥厚著	肥中厚等	肥少シク	肥少シク	シ稍々厚	ク	ク	ク	菲薄	ズ明ナラ	ク	肥中等厚度
淋巴結節狀浸	圓形細胞浸潤	エ細胞多シ	圓形細胞浸潤	ア細胞ノ浸集	結締組織粗ニ	圓形細胞多シ	認細血管多散ナ	エ細胞其他圓形細胞多シ	數圓形細胞多	粗細胞成分少シ	ア圓形細胞少數	明力纖維著	エ細胞多シ
一般ニ數少シ	多シ	シ腺組織ノ數少	多數ノ腺組織	少シ	機ニ在リ	旺盛ナル分泌	散在ス	數少ク表面ニ近ク位置ス	深部ニ腺葉集	腺組織少數ニ止ル	數少ク小集團ヲ呈ス	ク	少シ
腫脹體ハ多ク血液ヲ容ル	シ一般ニ血管少	腫脹體多シ	腫脹體ノ小ナルモノ多散アリ	毛細管ノ新生	血管少シ、腫脹體縮ス	血管一般ニ薄	シ血管ノ新生多	血管ノ新生多	腫脹體多キモ收縮ス	血管及腫脹體少シ、毛細管下方ニ走行ス	比較的血管ニ乏シ	腫脹體ハ小ナルモノ數多シ	血管比較的少シ
著シ	存腺上皮下及周圍ニ	少シ	ニ著明	輕度	輕度	輕度	著シ	全體ニ著シ	認メラ	認メラ	少シ	少シ	輕度
ブ細胞全般ニ亘リ著シ	チ多散見ル	エ細胞浸集ス	ブ細胞中等度	下多シ	數圓形細胞ナシ	映組織周圍ニ散見ル	フ及エ細胞中等度ニ在リ	集ス	認メラ	到ル所多散見ル	見ル	細胞アリ	エ細胞チ少シク見ル
中等度	上皮下ニ	認メラレ	腺組織周圍ニ數少	數ニ著明	上皮下ニ數多	腺組織ニ近ク少數	數著シク多	腺周圍ニ著シク多	認メラレ	全體ニ亘リテ少數	集合セルモノアリ	少數	腺周圍ニ少數
	多核白血球チ多ク見ル	エ細胞ハ表面ニ殆ドナシ					細組織一般ニ纖細ノ感アリ	小出血竈アリ		一般ニ炎症狀著シ		彈力纖維良ク發達ス	骨組織ハ小ニ呈ス、齒狀チ呈ス、彈力纖維ノ斷裂アリ

26	25	24	23	22	21	20
藤齋	谷長	島藤	橋板	永徳	我久	取香
♂	♂	♀	♂	♂	♀	♀
22	23	18	24	24	18	37
肥分 業大	肥中 度大	肥中 度大	肥中 度大	肥大 著	肥大 輕	肥中 度大
皮膚上	皮膚上	皮膚上	皮膚上	皮膚上	皮膚上	皮膚上
肥中 度厚	菲薄	肥少 度厚	肥少 度厚	肥中 度厚	肥中 度厚	肥中 度厚
エ細 胞多	集林 アバ	エ細 胞多	深粘 部膜	エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多
走管 ル螺	數少 シ排	粘液 腺大	腺大 集團	比較 的粘	比較 的粘	比較 的粘
盈一 般血	腫脹 體ハ	乏比 較的	腫脹 體ハ	腫脹 體ハ	腫脹 體ハ	腫脹 體ハ
度ニ 中下	孤立 性ニ	著シ ニ	遊離 ニ	結節 狀ニ	結節 狀ニ	結節 狀ニ
エ及 フ細	エ及 フ細	エ及 フ細	エ及 フ細	エ及 フ細	エ及 フ細	エ及 フ細
近ニ 多シ	近ニ 多シ	近ニ 多シ	近ニ 多シ	近ニ 多シ	近ニ 多シ	近ニ 多シ
エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多	エ細 胞多

下甲介上皮ハ一般ニ多列毳毛上皮デアツテ此ノ間ニ多數ノ杯狀細胞ヲ嵌在スルヲ常軌トスル。時ニ毳毛ヲ失ツテ柱狀上皮トナリ、更ニ重層扁平上皮ヲ見ル事モ屢々デアル、Oppliker (c) ニ依レバ此ノ扁平上皮層ハ前部ヨリ後方ニ向ツテ漸次減少スルガ、前部ニ於テハ男七二%、女五五%ニ、尙全長ニ亘テ之ノミノモノ三例ヲ見タト。余ノ例ニ於テハ一五%ニ當ルガ之ハ検査部位ノ相違ニ因ル事勿論デアル。前部、即チ鼻入口部ニ多キハ外來刺戟ニ依ル事ハ容易ニ肯首シ得ルノデアル。

毳毛上皮間ニ圓形ノ空隙ヲ生ジ、此ノ間ニ恐ラク死滅セル上皮細胞ト思ハレルモノ及ビ時ニ又遊走逸出シタ白血球等ヲ容レテ居ル場合ナドヲ認メル、Glas (c) ノ上皮内空胞 (Intraepitheliale Vakuen) 及ビ上皮内白血球集團 (Intraepitheliale Leucocytenhaufen) トシテ記載シ後 Oppliker (c) ノ變性空隙 (Degenerationsräume) トシテ報告シタモノニ相當スル。尙上皮間ニハ前記杯狀細胞ト相似タ、洋樽狀ノ「ヘマトキシリン」ニテ淡青色ヲ採ル腸上皮ノ如キガ集團シテ少數ニ存在スルヲ見ル事ガアル、所謂、上皮内腺 (Endoepitheliale Drüsen) ト稱スベキモノデアル。

粘膜上皮層ハ其ノ基底ニ於テ帶狀同質性ノ基底膜 (Basalmembran) ヲ以テ粘膜下層ト距テ居ル事ハ既ニ周知ノ事實デアルガ、第五、一七、

二〇例ノ如ク著シク肥厚シタ場合ト、第八、一九例等ノ如ク菲薄ノ度著シク殆ド認メラレナイ場合及此ノ中間ニ位スル種々ノ厚サヲ持ツ場合等ガアツテ頗ル動搖ノアルモノデアル。

粘膜下ノ組織ハ極メテ鬆粗デアツテ此ノ間ニ種々ナル結締組織細胞及炎症性細胞ヲ見ルノデアル。定住常在ノ結締組織細胞ニ就テノ記載ハ茲ニハ省略スル。上皮層ニ接近シテ最も多數ニ見ラレルモノハ淋巴球デアル、多少ニ拘ラズ是ノ滲集ヲ認メ得ル、殊ニ第一九、二〇、二二、二三、二五例ノ如キハ恰モ淋巴結節ノ如キヲ形成シテ居ル、併シ定型的ノ種子中心ハ之ヲ認メル事ハ出来ヌ。淋巴球ト相並デ多數ノ存在ヲ見ルノハ「ブラスマ」細胞デアル、時ニハ是ガ遙カニ淋巴球ヲ凌駕シテ多數ヲ占メテ居ル場合ガアル、之モ亦上皮直下ニ位置スルノガ最も多イノデアルガ他方、組織内部ニモ擴ソテ居リ、殆ド是レノミ集團シテ居ル如ク見ユル位置モアル。

「エオジン」嗜好細胞モ亦、前二者ニ劣ラズ多數ヲ檢出シ得ルガ（第一、二例等）、概シテ淋巴球ノ如ク多カラヌ、症例ニ依テ發現ニ著シイ相違ガアリ時ニハ殆ド見ラレナイ場合ガアル、又多數ガ一ヶ所ニ聚落スル如キ像ハ殆ド見ル事ハ出来ヌ。部位ハ上皮ニ接近シテ相平行セル状態ニ於テ見ラレル Vogel⁽²⁶⁾ ハ「エ」嗜好細胞ハ鼻茸組織ニ好シデ表ハレルト云フガ、必ズシモ鼻茸ニ限ラナイノハ前表ニ示ス所デアル。肥胖細胞ハ表在部ヨリモ寧ロ比較的深部組織中ニ散在シテ居ル、其ノ數ハ一般ニ少イ。中性嗜好白血球ハ少數例ニ於テ粘膜下ヨリ上皮層内ニ亘テ見ラレル、時ニ基底膜ヲ穿通スル基底小管ヲ通ジテ外表ニ向ツテ遊走セントスル像ヲモ見ル。

粘膜下組織中ニハ微細ナル彈力纖維ヲ混ジテ居ル、併シ少數例ニ於テハ檢出シ得ナイ例モアルノデアルガ、之等ハ染色、其他ノ操作ノ完全ナラザル結果トスベキデアル Seifert, Kolliker, Brunn, 久保氏⁽²⁷⁾ 等ハ存在スト云ヒ、Kopetzky⁽²⁸⁾ ハ尋常粘膜ニハ無ク肥大セルモノニ於テ上皮ト平行シテ著明ニ認メ得ト云テ居ル。

下甲介ニ於ケル腺組織(鼻腺 Gl. nasales)ニ就テハ Schmincke⁽²⁹⁾「據ルニ」初メ Kolliker (1852) ハ粘液腺トシテ記載シ、後 Haidenhein (1870) ハ漿液腺デアルトシタガ Stöhr (1883) ニ到テ混合腺デアル事が明ニセラレタ。下甲介ノ内側面ニ多ク外側ニ少ク、前部ニ多ク後方ニ向テ漸次減少スル事ハ一般ニ承認セラレテ居ル所デアル。余ノ檢索例ニ於テハ漿液腺ノ部ヨリモ、粘液腺ノ部分ガ多クヲ占メテ居ル様ニ見ラレル、粘液腺ガ比較的少イ場合ハ上皮中ノ壑狀細胞ガ多數ニ存在スル如キ觀ガアツテ此ノ間ニ何等カ代償性ノ關係アルモノニ非ザルカラ思ハシムルノデアル。甲介組織中ニ於ケル腺組織ノ占座部位ハ表面ニ近キ場合ト、深ク埋没サレテ居ル場合ト、又兩三個ノ腺葉ニ止ルモノト多數ノ腺葉ノ集落セルモノ等、種々ナル配置ヲ呈シテ居ル。腺葉間及腺組織周圍ニハ屢々淋巴球ノ浸集ヲ見ル、其他「ブラスマ」細胞、ルッセル氏小體(後述)等亦、良ク見ラレル所デアル。排泄管ハ多ク直走シテ表面ニ向フガ屢々螺旋形ニ、恰モ汗腺排泄管ノ如ク紆曲シ

テ涎々長蛇ノ如キ走行ヲ執ルモノガアル(第三例)。排泄管ノ外表開口部ニ近ク強ク擴張シテ囊腫ノ如キヲ造レルハ多數例ニ於テ見ラレル。甲介組織ノ血管系ニ就テハ、毛細管ノ新生ハ多クノ肥大セル例ニ於テハ證明シ得ル、此ノ走行ハ下甲介ノ中心部トモ謂フベキ甲介骨ノ近クヨリ放線狀ニ表面ニ向ツテ居ル。動脈壁ノ肥厚セルモノハ概シテ中年以上ノ例ニ於テ屢々見ラレル、又脈壁彈力纖維ノ膨大、斷裂等モ認メラレル。腫脹體ハ内腔ノ擴ガレルモノ狹少ノモノ、血液ヲ充盈セルモノ空虚ノモノ等種々ノモノヲ認メル。

甲介骨(Os turbinatum)ニ就テノ記載ハ多クヲ見受クヌ様デアル。前額斷面ニ於テハ薄イ骨廓ヲ認メル、之ガ單ニU或ハ6字形ヲ呈シテ居ルモノモアルガ更ニ複雜ニ其ノ内部ニ種々ノ方向ニ走ル骨梁ヲ以テ時ニ方形ニ、時ニ鱗ヲ交互ニ相重ネタ如キ網狀ヲ呈シテ居ルモノガ多ク、是等ノ骨組織ニ於テハ層板形成ヲ見ル事ガ出來ルガ、典型的ノ「オステオン」(Osteon)ハ認メ得ヌ。層板ニ介在シテ貼着線(Kittlinie, Ebner)又ハ境界線(Grenzlinie, Kolliker)ト稱セラレルモノガ多數存在セル、即チ甲介骨ニ於テモ骨質ノ添加、吸收ハ不斷ニ行ハレツ、アルモノト謂ハネバナラヌ。前記ノ骨廓内腔ハ一部脂肪組織ヲ容レ、一部ハ極メテ緩粗ナ一見膠樣組織ノ如キモノヲ容レテ居ル。毎常一、時ニ二個ノ壁ノ厚イ動脈ガ骨廓ノ略ボ中央部ヲ前後ニ貫通スル、其他少數ノ小動脈及腔ノ廣イ一層ノ内皮ヲ被ル靜脈ヲモ認メル。余ノ檢索例ニ於テハ肥厚性鼻炎特ニ其ノ若齡者ニ於テハ骨新生ヲ認メ、高年ノモノニ於テハ骨組織ノ萎縮ヲ認メル。若年ニ非ザルモ第二〇例ニ於テハ下緣ニ向ツテ棘狀ノ突起ヲ生ジ、此ノ新生ノ骨組織中ニハ多數ノ骨細胞ヲ見、邊緣ニハ造骨細胞ノ唱集。骨膜層ノ肥厚等見ラレル。之ニ反シ第六例ニ於テハ老人ニ非ザルモ骨組織ノ全般ニ亘リ菲薄トナリ、特ニ外骨膜層ニ於テハ到ル所ニ、ハウシツブノ吸收門窩ヲ造リ鋸齒狀ノ外觀ヲ呈シ、此ノ部ニハ定形的ノ破骨細胞ヲ見、彈力纖維ハ斷裂、破碎セラレテ殆ド認メ難キニ到ツテ居ルモノモアル、骨髓腔ニ向フ内骨膜層ニハ此ノ如キ變化ハ見ラレヌ。

中 甲 介
第 二 表

番号	姓名	性別	年齢	肉眼的所見	上皮	基底膜	固有粘膜層	腺組織	血管系	淋巴球	其他	ルツセル氏小體	備考
1	神尾	♂	21	圓形ニ肥毛上	著明ナラズ	結締組織極メテ粗	粘液腺多シ排泄管ノ囊腫狀擴張アリ	血管數少シ、腫脹體小ニシ	シドナ	炎症細胞他	上皮下ニ中等度	細胞成分少ク水腫狀	
2	佐木	♀	18	輕度ニ肥度ニ	菲薄	圓形細胞散存	表面ニ近ク位	腫脹體少ク萎縮狀ヲ呈ス	腺葉周圍ニ少シク全般ニ亘リ輕度	ブ細胞ヲ全般ニ認ム	ズ認メラレ		

6	5	4	3
山横	泉	田池	具須
♂	♂	♀	♂
36	25	20	23
肥中等度 大度	度肥大輕	膨著シク 大	肥中等度 大度
ク	ク	ク	ク
肥中等度 厚度	厚キモ 境界明 ナラズ	殆ド認 メラレ	肥中等度 厚度
ク浸集 圓形細胞少シ	的細胞成分比較 少シ	ク浸集 圓形細胞少シ	ク
集團チナナス 良ク發達シ大	腺組織稀少	排灌管ノ擴大 アリ	粘液腺頗ル多 シ擴大排灌管
細管ニ富ム 表面ニ近ク毛	血管充盈、毛 細管ニ富ム	血管ニ乏シ	血管放線狀ニ 走り充盈セル モノ多シ
中等度	輕度 適メテ	度圓上 線皮中 皮下及 中等	度上 皮中 下
較的多シ	シ 各種細胞共少	プ細胞多シ	プ細胞中等度
少數	腺周圍ニ 少數	腺周圍ニ 中等度	全體ニ互 リ中等度
小出血アリ		骨梁薄キモ大 キク發達	骨梁厚肥チ呈

中甲介ノ六例ハ凡テ肥大症、又ハ他ノ目的ニテ生體ヨリ切除セラレタモノデアル。上皮ハ總テ毳毛上皮カラ成ル、此ノ上皮層ノ高サハ下甲介ノモノニ比スレバ稍々低イ。基底膜ハ概シテ菲薄デアル、比較的厚イト思ハレルモノハ境界ガ著シク不明瞭デアル。

上皮下ニ於ケル圓形細胞ノ浸潤ハ是ヲ存セザルモノアリ、又存スルモノモ輕度デアル、淋巴結節狀ノ聚落等ハ認メラレス。粘膜下層ニ於ケル彈力纖維ハ第四例ニ於テハ少數ヲ見ルガ、他ノ例ニハ亦認メ難イ。腺組織ハ下甲介ニ劣ラズ多數ヲ見ル、彼ニ比シテ特ニ粘液腺ガ著シク多イ。此ノ排灌管ノ延長擴大ノ著明ナモノモアル。腺組織周圍ニ於テハ炎症性ノ浸出細胞ハ極メテ少イ。全例ヲ通ジ血管、特ニ動脈ニ乏シイ。腫脹體モ亦同様デアル、此ノ大サハ下甲介ニ比シテ遙カニ狹少デアル。

炎症性細胞ノ種類ハ下甲介ト同様ノモノヲ認メルガ、數輩ハ著シク尠イ、特ニ「エオジン」嗜好細胞ハ之ニ於テハ少數ヲ見ルニ止マル。ルツセル氏小體ハ四例ニ於テ認メルガ之モ亦數少イ。中甲介骨ハ篩骨ノ一部デアルガ、茲ニ於テモ亦、骨質ノ添加、吸收ヲ見ルノデアル、第四例ニ於テハ造骨機ノ亢進ヲ認メル。

文獻ニ徴スルニ、特ニ中甲介ノ組織的所見トシテ舉ゲラレタルモノハ無イノデアル、茲ニ掲ゲタ檢索例ハ僅カニ六例デ、而モ此ノ凡テガ手術ニ依テ得タモノデアルカラ、之ヲ根據トシテ全般ヲ律セントスルモノデハ無イガ、余ノ觀ル所ヲ以テスレバ各組織成分ハ敢テ下甲介ト異ル處ハ無イ。唯之ニ於テハ一般ニ纖弱ナル造構ヲ保有スルモノト謂ハネバナラス。炎症性機轉モ亦下甲介ニ比シテ遙カニ輕度デアル事ハ前述スル所ニ據テ明カデアル。

中 隔

第一例 小、勇、♂ 上皮ハ一部分分離シテ居ルガ柱狀上皮デアル、此ノ上皮層ノ高サハ中、下甲介ノ其ニ比シテ遙カニ高イ。上皮層内ニ變質腔、上

皮間腺等ハ見ラレヌ。基底膜ハ所ニ依テ厚ク見ラレルガ又所ニ依テハ殆ソド認メラレヌ部分ガアル、即部位ニ據テ異同ガアル。粘膜下層ニ於ケル炎症性細胞ノ浸出ハ著シクハ無イガ、尙少數ノ淋巴球ヲ認メル、結締組織ハ鬆粗デアルガ甲介ノモノニ比スレバ粗大ナ感ガアル、此ノ間ニ混在スル彈力纖維ハ亦甲介ニ於ケルモノノ如ク細細デハ無イ。中隔ノ軟部ノ大部分ハ腺組織カラ成ル、之ハ甲介ノモノト同様混合腺デアル事勿論デアル、排液管ノ囊狀擴大モ亦所々ニ見ル事ガ出來ル、腺組織ノ周圍ニ於テモ特ニ學カベキ炎症性細胞ノ浸襲等ハナイ。血管系ニ於テハ壁ノ厚イ可成ニ大ナル動脈ヲ見ル、毛細管ノ新生、其他一般ニ細血管ハ數少イ。腫脹體モ少數ヲ認メルニ過キヌ。軟骨膜ハ肥厚ヲ呈シテ居ル所ニ間隙ヲ生ジテ各少許ノ脂肪組織ヲ容レテ居ル、此ノ爲メニ軟部組織トハ一部宛、隔離セラレテ居ル感ガアル、軟骨ノ例ニ於テハ此ノ少許ノ脂肪組織ヲ容レル爲メニ、其ノ部ニ四高ヲ生ジ邊緣ハ波狀ヲ畫イテ居ル。中隔方形軟骨組織ニ於テハ特記スベキ事項ヲ認メヌ。

第二例 坂 平、 $\uparrow$ 、三七歳 扁平重層上皮ヲ附隨スル。基底膜ハ認メラレヌ。上皮下層ニ於テハ圓形細胞ノ浸潤ハ殆ド見ラレヌ。血管ハ數少ク、内容ハ空虚デアル。腫脹體ト思ハレルモノハ殆ド見ラレナイ、稍大ナル動脈ガアル。腺組織ハ本例ニ於テモ亦良ク發達シ、上皮ヨリ軟骨組織迄ノ全組織ヲ滿シテ居ル、唯ニ於テハ痰液腺ノ部分ガ多クチメテ居ル様デアル。腺組織ノ周圍及腺葉間ニハ小數ノ「プラズマ」細胞ト比較的多數ノルツセル氏小體ヲ認メル事ガ出來ル、腺排液管ノ擴大ノアル事ハ前例ト同様デアル。稍肥厚セル軟骨膜ハ軟骨ト併行重疊シテ定テ居ル。本例ニ於テハ此ノ部ニ脂肪組織ヲ認メヌ。中隔軟骨、亦著變ヲ見ナイ。

中隔ハ二例共ニ屍體ヨリ得タモノデ生前、鼻疾患ヲ有シナカツタ者デアル。以上ノ二例ハ共ニ炎症性機轉ハ極メテ輕度デアル、併シ第二例ニ於テハ多數ノルツセル氏小體ヲ認メル。軟骨組織ニ於ケル新成造形機轉ハ本二例ニ於テハ立證スルヲ得ナイ。

下鼻道側壁

第 三 表

番号	姓名	性	年齢	上 皮	基底膜	固有粘膜層	腺組織	血管系	淋巴球浸潤	炎症細胞	他	ルツセル氏小體	備 考
1	下木	♂	34	皮膚毛上	存在明ナラズ	結締組織ハ極メテ鬆粗	混合腺多數アリ、粘液腺ハ分秘旺盛ナリ、排液管開口部ノ擴大アリ	毛細管表面ニ向テ放線狀ニ走ル	上皮下ニ濾胞狀ヲ呈ス	ブ及エ細胞少數	腺組織周圍ニ多數	小出血點ヲ見ル	
2	浦北	♂	17	ク	肥厚中等度	結締組織細胞、圓形細胞ヲ散在性ニ見ル	排液管開口部ノ擴大アリ	血管壁少シク肥厚	比較的輕度	ブ細胞ヲ見ル	全體ニ亘リ多數	小出血點ヲ見ル	
3	保久	♂	51	杯狀細胞少シ	肥著シク	圓形細胞多シ	管ノ走行曲折不整ニテ腫脹狀ヲ呈ス	血管壁ノ肥厚著シ	輕度	エ細胞比較的多数	腺周圍ニ少數	小出血點アリ	神經纖維ヲ見
4	友長	♂	30	皮膚毛上	肥著シク	淋巴球ヲ細胞多ク見ル	血液腺比較的多数	血管ニ乏シ	著シカラズ	比較的少シ	全體ニ亘リ中等度	骨膜層ノ結締組織増殖アリ	

5	6	7	8	9
島 福	田 黒	田 武	石 高	藤 伊
♂	♂	♂	♀	♂
20	17	19	21	18
ク	ク	ク	ク	ク
肥厚著	中等度	肥厚著	中等度	中等度
細胞成分少 結締組織多 走行著シ	円形細胞ヲ見	淋巴結節ヲ見	纖維彈力纖維 アリ、細胞成 分少シ	圓形細胞浸集
血液腺多ク、 粘膜炎上表ニ位 置ス	漿液腺著シク多 シ、管ノ囊腫狀 ヲ呈ス、部アリ	周圍ニ淋巴球 浸集ス	漿粘混合相半 ス	著シク管腔ノ 擴大セルモノ アリ
比較的血管ニ 富ム	血管周圍ニ結 締組織ノ増殖アリ	血管ニ乏シ	中等大ノ血管 ヲ見ル	血管充盈ス、 壁稍々厚シ
殆ドナシ	中等度	輕度ナルモ上 皮下ニ結節ヲ 造ル	輕度	中等度ニアリ
ニ細胞ヲ少數 ニ見ルノミ	ニ細胞多核球 散在ス	少數ノニ細胞 ヲ見ル	ニ細胞少數	多核及ニ細胞 多シ
上皮下ニ中 等度	上皮下ニ中 等度	腺周圍ニ多 數	腺周圍ニ中 等度	上皮下ニ中 等度
骨質ノ變化少 シ	骨髓肥厚ナシ	小出血竈アリ		出血竈アリ

上皮ハ凡テ毳毛上皮デアル、此ノ間ニ盃狀細胞ヲ混在スル事、他ノ鼻腔粘膜ト全ク同一デアルガ、第三例ノ如ク殆ド盃狀細胞ヲ認メ難キモノモアル、一般ニ毳毛細胞ニ對シテ之ニ嵌在スル盃狀細胞ノ比ハ各例甚ク不同デアル、變質腔及定形的ノ上皮間隙ノ如キハ茲ニ於テハ檢出シ得ナイ。基底膜ハ第一例ノ他ハ皆良ク發達シテ居ル、甲介ノモノニ比シテ概シテ厚イ感ガアル。粘膜固有層中ニハ種々ナル炎症性細胞ノ浸集ヲ可成ニ見ル事が出來ル、上皮層ニ接シ、又ハ之レヨリ少シク離レテ定型的ノ淋巴結節ノ存在ヲ見ル。腺組織ハ何レノ例ニ於テモ良ク發達シテ居ル、表面ニ近ク位置スルモノ、深ク骨膜層ニ接シテ位置スルモノ、又全層ヲ縱斷スル如ク深部ヨリ上皮下ニ近ク幅細ク長ク配置セラレタモノモアル、腺葉間又ハ腺組織周圍ニハ多クノ例ニ於テ多少ニ拘ラズ淋巴球ヲ認メル、其他組織ノ全般ニ亘テ「ブラスマ」細胞、「エオジン」嗜好細胞、中性嗜好細胞、肥胖細胞、組織球等ヲ見ル事、甲介組織ト相似タモノデアル。血管系ニ於テハ特ニ新生セラレタ毛細管等ト思ハレルモノハ殆ド見ナイ、小ナル動靜脈ハ他ト同様、普通數ヲ認メル。靜脈ノ内腔ノ擴大シテ腫脹體ニ近キ形ヲ採テ居ルモノガアルガ、下鼻側壁粘膜炎中ニハ特ニ腫脹體ナリトシテ擧ゲ得ルモノハ無イ様デアル。ルッセル氏小體ハ上皮皮下組織及ビ腺葉間、腺組織周圍等ニ於テ多少ニ拘ラズ凡テノ例ニ於テ認メル事が出來ル。

4 顎 窩

Nümann 氏ハ慢性炎症ノ際ニ於ケル實粘膜炎ノ變化ヲ次ノ如ク三種ニ類別シテ居ル、一、加答兒型(水腫型)ニ於テハ粘膜炎鹽漬肉狀ヲ呈シ、充血ハ輕度、息肉又ハ囊腫形成ヲ見ル、毳毛上皮ヲ保有スル。二、原發化膿型、粘膜炎ハ腫脹及ビ肥厚ガアリ、強度ノ細胞浸潤ガアツテ、細胞成分ニ富ム事、肉芽組織ノ如クデアルト、表面ハ粘液膿性ノ分泌物ニ被レテ居ル。三、混合型、以上ノ二型ノ混合シタモノデ

第四表

番号	姓名	性別	年齢	上皮	基底膜	固有粘膜層	腺組織	血管系	其他	ルツセル	備考
1	田窪	♀	19	皮膚毛上	殆ド認めラレ	圓形細胞多シ	管腔大シ、排泄液多シ、淋瀝	毛細管多、致ア	炎症細胞	氏小體	
2	名山	♀	28	皮膚柱狀上	著明ナ	圓形細胞アリ	存在セズ	表面ニ向テ多	シ	認めラレズ	出血滲アリ
3	郷本	♀	21	皮膚柱狀及皮膚毛上	殆ド認めラレ	少數ノ圓形細胞アリ	漿液腺ナ多ク分泌ニ在リ	血管ニ乏シ	エ細胞ナ多數ニ見ル	認めラレズ	固有層内ニ囊腫アリ
4	島福	♂	20	皮膚柱狀上	ク	見ル	擴大排尿管ナ	表面ニ近ク毛細管充盈ス	著シ	中等度ニ在リ	至ル所ニ出血滲アリ
5	濱小	♂	17	皮膚毛上	認めラ	鬆組織間ニ在リ	骨膜層ニ近ク小血管多シ	上皮下ニ輕度	著シ	中等度ニ在リ	骨膜層ノ肥厚アリ
6	石高	♂	21	皮膚毛上	ク	圓形細胞中等度	所々ニ集團ス	毛細管ニ富ム	エ及ブ細胞多シ	認めラレズ	
7	川森	♀	46	皮膚柱狀及皮膚毛上	著明ナ	細胞成分少シ	存在セズ	多シ	シ	認めラレズ	
8	原篠	♂	43	皮膚毛上	ク	組織部ニ浸出液ニ所々ニ滲留ス	深部組織中ニ集團スルモノアリ	骨膜層ニ近ク位置シ、壁稍厚シ	特ニ擧グベキモノナシ	認めラレズ	小出血滲所々アリ
9	岸山	♂	20	皮膚毛上	ク	他ノ部ヨリ圓形細胞寧ろ少シ	深部ニ粘液腺アリ	血管多カラズ外膜ノ肥厚稍著シ	著明	全體ニ亘リ多數	所々大小出血滲アリ

アル。之等三型ノ全體ヲ通ジテ結締組織及ビ血管ノ新生ヲ見ルノハ一般慢性炎症ニ通有スル如クデアルトシテ居ル。Mannase (3) ニ從フ時ハ慢性炎症ニ際シテハ特徴トモ云フベキ息肉、囊腫形成等ハアルガ、普通通ハレル所ノ骨生ハ認めラレズ、反ツテ屢々骨ノ萎縮ヲ見ルト。一、水腫型ニ於テハ結締組織ノ新生ハ殆ドナク、細胞ノ増殖ガアル。二、肉芽型ニ於テハ血管ノ新生ヲ主トシ、上皮ガ肉芽組織ニ依テ穿通セラレテ居ルカ又ハ内皮狀ニ扁平セラレテ居ル。三、纖維型ハ上皮ハ侵サレズ上皮下ニ鞏固ノ結締組織ノ新生、遊離等ヲ見ル。Hjelt (4) 亦 Mannase

ト殆ド同一ノ分類ヲ試ミテ居ル。余ノ研究例ハ慢性炎症ニ罹レル者ノミノ九例ニ過ギヌガ、此ノ組織的所見ハ各例各態ヲ呈シテ居ル、之ヲ假リニ前ニ掲ゲタル範疇ニ分屬セ

シメントスルナラバ、第三、四、五例等ハ水腫型ニ、第二、六例等ハ肉芽型ニ、第四、九例等ハ化膿型ニ、更ニ第一、八例等ハ水腫型ニ纖維型ヲ加味セル如キ狀態トスベキデアル。上皮ハ全例ニ亘テ一部又ハ大部分分離シテ居ルガ、遠残留着セルハ孰レモ毳毛又ハ圓柱上皮デアツテ、*Ophiofer* (a) 又ハ *Manasse* (c) ノ肉芽型ニ云フ如キ扁平上皮ハ認めラレナイ。上皮下ヨリ組織全班ニ及ブ炎症性浸出細胞ノ聚群ハ化膿型、肉芽性等ニ入ルモノトシタ諸例ニ於テハ極メテ高度デアル。水腫型ト看做スモノニ於テハ輕度デアル事勿論デアル、水腫型ノ高度ノモノ(第三例等)ニ於テハ網目狀ノ組織間隙ヲ多數ニ造リ、此ノ内ニ漿液性物ヲ藏シテ居ル。腺組織ハ症例ニ依テ數量ニ格段ノ差ガアリ、第六、九例等ニ於テハ大集團ヲナシ、圓形細胞ノ浸潤ヲ伴セ、所ニ依テハ腺腔、不規則ナル擴大ヲ呈シ、恰モ腺腫ノ狀ヲ呈シテ居ル部分ガアル、連續切片ヲ通ジテ遂ニ腺組織ヲ見出し得ザル例(第二、五、七例)モアル。

表面ニ近キ部ハ圓形細胞浸集シ細血管豐富ニ肉芽性ヲ呈シ、深部ニテハ纖維ノ走行整粗ニ組織間隙ニ漿液樣浸出物ヲ見ルニ過ギヌ、水腫狀ノ像ヲ認メル等同一例ノ然モ同一切片ニ於テスラ異レル病型ヲ呈シテ居ル事屢々デアル、此ノ如ク上顎竇粘膜ノ病的變化ハ實ニ多樣デアツテ、一定ノ範疇ニ律スル事ハ不可能ニ近イ、前ニ紹介セル *Nußmann* (a) *Manasse* (c) 等ノ分類アルモ、各型ガ相混合、錯綜シテ發現スル時ハ、其ノ孰レニ屬セシムベキカ迷ハザルヲ得ザル狀態トナルノデアル、*Ophiofer* (a) ハ多數ノ副鼻腔粘膜ヲ檢シタルモ、之ヲ類別スル事ナク各例毎ニ就テ記載シテ居ル、亦故無キニ非ズデアル。

鼻 茸

上皮ハ遊離尖端部ニ於テハ重層扁平上皮トナレルモノ(第二、三、五例)圓柱上皮トナレルモノ(第六例)等アルガ、莖ニ近キ部分ニ於テハ孰レモ毳毛上皮デアル、唯一例ノミ圓柱上皮ヲ保ツ。粘膜固有層ニ於テハ多少ニ拘ラズ圓形細胞ヲ見ル、深部ニハ同質性ニテ「ヘマトキシリン・エオジン」ノ色ヲ同等ニ淡ク攝ル部分ヲ存スル例ガ多イ、恐クハ粘液、或ハ又漿液性浸出物ト思ハレル、此ノ者ハ周圍ト劃然タル境界ハナク、時ニ微細纖維ヲ以テ網狀ニ區劃セラレタモノモアル。鼻茸組織ヲ本班ニ通ジテ謂フ時ハ概シテ細胞成分ニ乏シク、纖弱ナル結締組織ヲ極メテ緩鬆ニ含シデ居ル。毛細血管ハ多クノ例ニ於テ見ラレル、或ル者ニ於テハ壁ノ薄イ靜脈ノ如キガ血液ヲ充盈シテ居ル。毛細管周圍ニ圓形細胞ノ集合シテ居ルノハ屢々デアルガ、第八例ニ於テハ中性多核白血球ヲ此ノ部ニ見ルノデアル。第四例ハ中隔鼻茸デアル、中隔カラ發生スル鼻茸ハ一般ニ出血性鼻茸ト稱セラレルモノ多ク、組織學上ニモ、亦血管腫又ハ其ノ混合型腫瘍ノ像ヲ呈スルモノデアルガ、(小此木、平川)、余ノ例ニ於テモ大小ノ壁ノ極メテ薄イ血管ニ富ミ、特ニ鼻茸ノ中心部ニ著シク、稍々血管腫ニ近イ趣ヲ呈シテ居ル。他方淋巴球「ブラスマ」細胞ハ頗ル多數存在シ、結締織成分ハ極メテ緩鬆デアル。特異ナルハ比較的大形ノ圓形又ハ之ニ近イ形ヲ採ル色素細胞ヲ多

第五表

番号	姓名	性別	年齢	上皮	基底膜	固有粘膜層	腺組織	血管系	淋巴球	炎症細胞	ルツセル	備考
1	本 榎	♀	20	重層柱狀上皮	認めズ	組織極メテ緩 液細胞チ見ル	認めメラレズ	血管ニ乏シ、 表面ニ向ヒ放 線狀ニ走ル毛 細管ニ三アリ	特ニ多カラズ	多核球多シ、 エ及ブ細胞モ 認めム	認めメラレズ	
2	澤黒	♂	38	一部扁平上皮	一部ニ存在ス	上皮下ニ多核 球多ク内部ニ 淋巴球多シ	紆曲セル排泄 管チ見ル	血管ニ乏シ	全組織ニ亙リ 特ニ深部ニ多 シ	多核及ブ細胞 多シ	認めメラレズ	
3	田黒	♀	45	一部扁平上皮	部位ニ コリ存	遊離下端ハ細 胞成分ニ乏シ	漿液腺比較的 多シ	數少シ	少數ニ在リ	シ	大ナルモノ チ多數ニ亙 リ多數	
4	浦松	♂	40	扁平上皮	著明ナ ズ	多數ノ色素細 胞チ見ル	認めメラレズ	血管ニ富ム壁 薄キ腔ノ擴大 セルモノアリ	著シク浸集シ 結節狀チ呈ス	ブ細胞チ多數 見ル	全體ニ通ジ テ多數アリ	中隔ニ發生セ ル鼻茸ナリ
5	田 井	♂	23	大部扁平 一部ニナリ 柱狀上皮	柱狀上皮 平ノ部ニ アリ	粘液組織像チ 呈シ、微細纖 維チ多數見ル	排泄管ノミチ 認めム	毛細管多數走 行ハ外膜ニ近 ク	比較的少シ	エ及ブ細胞多 シ	全體ニ亙リ 小數ニ在リ	
6	田 柴	♂	22	一部扁平 一部柱狀 上皮	認めズ	内部所々ニ漿 液溜留ノ像 アリ	認めメラレズ	血管壁稍々肥 厚セルモノア リ	特ニ多カラズ	エ細胞チ少數 ニ見ル	數アリ	
7	原 篠	♂	43	扁平上皮	認めズ	組織緩疎ニ細 胞成分亦少シ、 脂肪球チ散在 ス	擴大セル排泄 管チ見ル	壁薄ク血液チ充 盈セルモノ多 シ		多核及エ細胞 極メテ多シ	認めメラレズ	
8	田 株	♂	10	扁平上皮	著明ナ ズ	中央部ニ液狀 溜留物アリ	認めメラレズ	性球アリ、周 圍ニ中	小數ニ在リ			

組織的所見總攬

數ニ混在シテ居ル事デアル。小此木⁽³⁹⁾ニ據レバ此ノ色素顆粒ハ Lipochrome デ之ヲ含蓄スル細胞ハ組織球ニ類スルモノナラント。余ハ今之ニ就テ精細ナル組織化學的研索ヲ施スノ機ヲ得ナイガ、恐クハ Lipofuscin ナランカト想像スル。

前數項ニ亙ツテ固有鼻腔及ヒ副鼻腔粘膜ノ慢性炎症ノ際ニ於ケル所見ニ一部ノ健康ト思ハレルモノノ所見ヲモ加ヘテ、各組織毎ニ通約的ニ記述シタ。本項ニ於テハ以上ノ全體ヲ總括シ、併セテ文献トノ比較考察ヲモ試ミントスルノデアル。

鼻腔及ヒ副鼻腔ヲ通ジ、粘膜上皮ハ素ト毳毛圓柱上皮ト此ノ間ニ混在スル盃狀細胞トカラ成ル、之ガ慢性炎症ニ際シテハ毳毛ヲ失ツテ圓柱

上皮トナリ、更ニ扁平上皮トナル事ハ Oppikofer, Minnase 等ノ記載アル事ハ前ニ述ベタ。副鼻腔ニ屢々發生スル扁平上皮癌ノ成因ニ就テモ、茲ニ源ヲ求メントスルハ一般周知ノ事柄デアル、余ノ實驗例ニ於テハ中甲介、下鼻道側壁、上顎竇等ノモノニ扁平上皮ハ檢出シ得ナカッタガ、之等ハ症例ノ僅少ナルニ歸スベキモノト惟ハレル。上皮細胞ノ剝離ハ多數例ニ亘テ之ヲ見ル、勿論、炎症性變化ノ一部分トスベキデアルガ、又手術的操作ノ際ニ人工的ニ剝脫セルモノモ多キヲ數フル事ト思フ。上皮間ニマ、見出ス所ノ『變性空隙』ニ就テハ前項ニ既ニ記シタ所デアルガ、蓋シ炎症機轉ノ旺盛ナルニ際シテ相隣接セル數個ノ細胞群ノ死滅スル事ニ依リ、更ニ又之ニ遊走セル白血球等ヲ加ヘ生成スルモノニ非ザルカ。『上皮内腺』ニ就テモ亦兼ニ述ベタガ、余ノ研索例ニ於テハ變性空隙ト共ニ下甲介上皮ニノ見出シタモノデアル。抑モ此ノ上皮間腺ハ始メテ Zarniko (1894) ⁽²⁵⁾ガ味雷ニ似タモノトシテ記載シ。病的變化ニ因ル生産物トシタ、Boeninghaus ⁽²⁶⁾ハ之ヲ肥厚鼻粘膜上皮ニ於ケル粘液腺トシテ記載シテ居ル。Corles ⁽²⁷⁾ハ之ニ反對シテ肥厚上皮ニ現ハレル味雷樣造構物ハ獨立ノ粘液腺ニ非ズシテ鼻腺排泄管上皮ノ粘液變性ニ外ナラズトシタ、然シ Cordes ⁽²⁸⁾ニ對シテハ更ニ Zarniko ⁽²⁵⁾ Citelli ⁽²⁹⁾等ガ反駁ハテ居ル。Schaffer, Opplikofer ⁽³⁰⁾ハ前掲ノ上皮内腺ノ名ヲ附シ、全ク尋常ノ鼻粘膜ニ見出シ得ルモノトシタ Schmacher ⁽³¹⁾ハ之ヲ以テ病的生産物トスベキデハ無イガ、少クとも病的變化ヲ起セル粘膜ニ在テハ、ヨリ多ク遭遇スルト。余モ亦 Schumacher ニ同意ヲ表スルモノデアル。尙、上皮内腺ニ就テハ Klein ハ尿道粘膜ニ Schaffer ⁽³²⁾ハ睪丸輸尿管上皮ニ見出シテ居ル等ノ點カラ推シテ、之ガ單ニ鼻粘膜ノミニ局在スルモノデ無イ事ガ判ル。併シ之ガ Schaffer ⁽³³⁾ノ云フ如ク兩棲動物ノ表皮ニ見ラレル胞狀單腺ト近似ノモノカ否カハ明カナシ得ヌ。

基底膜ニ就テハ彼ノ Zuckerkanal ハ凡テノ例ニ存在スルモノデ無イト云テ居ル、Chatellier ハ肥厚粘膜ニノミ見ルモノトシタガ、Schiefferdecker ⁽³⁴⁾ハ尋常ノモノニモ見テ居ル、唯ダ肥厚粘膜ノモノハ基底膜モ亦肥厚シ發見ニ容易デアルト。余ノ觀ル所ヲ以テスレバ上顎竇及ビ鼻茸ヲ除イテ、殆ド凡テノ例ニ見ルモノデ檢出モ亦極メテ容易デアル。肥厚性鼻炎ノモノニ厚シト云フモ、余ノ下甲介ノ九例迄ト十例以下トノ間ニ特ニ差異アリトハ云フヲ得ナイ。

腺組織ハ中、下甲介、中隔等ニ於テハ多數ヲ認メ、配置モ整然タルノ觀ガアルガ、下鼻道ニ於テハ稍々不整ニ、上顎竇ニ於テハ存在ハ極メテ不定デアル、連續切片ヲ通ジテ遂ニ發見シ得ザルモノモアルガ、反テ又全粘膜ガ腺組織ヲ以テ充滿サレテ居ル如キモアル。腺排泄管ノ走行中、種々ナル部位ニ於テ、特ニ上表開口部ニ近ク囊腫狀ノ擴大ヲ見ルハ屢々デアル。此ノ囊腫狀壁ノ凹凸不平等ヲ呈シ、腺腫ノ如キ像ヲ呈スルヲ上顎竇ノモノニ見、排泄管ノ螺旋形ニ迴轉走行スルヲ下甲介ノモノニ見タ、極メテ興味アル所見ト云フベキデアル。岡田博士 ⁽³⁵⁾ニ據レバ腺葉ノ囊腫狀擴大ガ鼻茸ニ屢々ナリトセラレルガ余ノ例ニ於テハ認メラレヌ。上顎竇粘膜ノ固有層、骨膜層、腺組織等ニハ往々石灰ノ

沈着ヲ見ル事アリト云フモ、余ノ例ニ於テハ檢出スル能ハナカッタ、尙之ニ就テハ最近宮城氏ノ廣汎ニ亘ル業績ガ發表セラレタ。

血管系ニ於テハ屢々管壁ノ肥厚ヲ呈スルモノヲ見ル、特ニ中年以後ノモノニ著シイ。血管周圍ニ淋巴球、「プラスマ」細胞等ノ殊ニ集簇スルヲ見ル事モ往々デアル、之等ハ動脈周圍炎或ハ靜脈周圍炎等ヲ起セルモノト看做ス可キデアル。腫脹體ハ中、下甲介ニ最も良ク發達シ、中隔ニ稍々劣ル、鼻道側壁ニ於テハ靜脈腔ノ擴大セルモノカ腫脹體ナルカ判定ニ苦シムモノガアル。竇粘膜ニ於テハ最早、腫脹體ヲ見出ス事ハ出來ス。血管ノ新生ハ各組織ニ之ヲ見ルガ、上顎竇粘膜ニ於テ最も著明デアル。組織内各部位ニ亘テ往々ニ多少ノ出血ヲ見ルガ、之ハ炎症ニ因ルモノアル事勿論デアルガ、一部ハ寧ろ手術ニ際シテノ切除、剝離等ノ外力ニ依テ起レルモノト考ヘラレル。

骨組織ノ研索ハ余ノ論題外デハアルガ、上顎竇ノ慢性炎症ニ際シテハ骨壁ニモ亦變化ヲ及ボス可キハ想像ニ難カラヌ所デアル。Hajek ハ骨質ノ肥厚及ビ破壊ヲ舉ゲ、Manasse ハ反テ吸收菲薄トナルトシテ居ル、此ノ可否孰レニ在ルカハ他日ニ俟ツ。下甲介骨ニ就テハ軟部ニ肥厚アルモノニ於テ明カニ骨質ノ新生ヲ確證シ、又他ノ或ル者ニ於テ吸收セラレツ、アル像ヲ見タ。Guth⁽⁶⁾ ハ肥厚性鼻炎ニ於テハ骨ヲ除イタ他ノ凡テノ組織ガ之ニ參與スルトシタガ、余ニ於テハ骨組織モ亦之ニ參與シ、彼ノ説ト相容レヌ事實ヲ認メテ居ル。眞性臭鼻症ニ於テハ骨質ノ吸收アルヲ謂ハレテ居ルガ、余ハ臭鼻症ニ非ザルモノニ著明ナル窩狀吸收ヲ見テ居ル。從來、是等骨組織ノ觀察ハ閑却放棄セラレテ居ル様ナ傾ガアルガ、甲介骨質ノ吸收、添加ノ機轉ハ比較的旺盛ナモノデアル。

炎症性細胞成分ノ内、全例ヲ通ジテ最も多ク發現スルモノハ淋巴球デアル。特ニ上顎竇粘膜ノ原發化膿型 (Mikulicz)、肉芽型 (Mannase)、浸潤型 (Hajek) 等ト云ハレテ居ルモノニハ夥シイ數ヲ認メル。一例ノ中隔鼻茸ニ於テモ斯ノ如キ像ヲ呈シテ居ル。其ノ他ノ者ニ於テモ種々ナル程度ニ於テ之ヲ見ルノデアルガ、上皮ニ近イ粘膜固有層ニ多數ヲ見、深部ニテ骨或ハ軟骨組織ニ近ヅクバ殆ド全ク認メザルニ到ルノデアル。血管及ビ腺組織ノ周圍ニハ又屢々集簇スルヲ見ル、概シテ下甲介、上顎、鼻茸等ノモノニ多イ。淋巴結節ノ存在ハ Zuckerkandl, Kubo^(22, 23) Ruggini⁽²⁵⁾ 等ノ記載スル所デアルガ、炎症ノ爲メニ浸出群簇セルモノカ、固有ノ濾胞ナルカ鑑別ヲ要スル。余ノ例ニ於テハ種子中心ヲ有スル定型的ノモノハ下鼻道側壁粘膜ニ於テ證明シ得タニ過ギヌ。

「プラスマ」細胞モ亦淋巴球ト同様ニ甚タ多ク見ラレル、上皮ニ近ク、基底膜ニ相平行セル如キ狀態ニ在ルモノ最も多ク、次デ血管、腺葉、腺管周圍等ニ集合シテ居ル。淋巴球ヨリモ寧ろ「プ」細胞ガ多數ニ存在スル如キ例モアル。鼻茸ニ於テハ他ノ如ク上皮下ニ駢列スル場合モアルガ、概シテ全組織ニ亘リ瀰蔓、散在シテ居ル。「プ」細胞ハ一般ニ慢性炎症特ニ微毒、淋疾等ニ際シテ侵襲ヲ見ルハ周知ノ事實デアルガ、胃腸ニ於ケル息肉 (Hanselman, 29) 楠 (Chuma 29) 余ノ鼻茸等ニ於テモ亦多數ニ見ルハ前ニ記セル如クデアル、鼻茸ニ限ラズ余ノ研索セ

ル鼻腔粘膜ノ凡テニ亘テ、斯ク多數ヲ見ルハ興味アル事實デアル。「ブ」細胞ガ好シデ血管周圍ニ團聚スルハ福士博士ガ微毒性大動脈炎ニ於テ注目セル所デアアル。「ブ」細胞ガ多數群集セル場合ニハ定型のノモノノ他、變性型ヲ混在スル事屢々デアアル。二核、稀ニ三核ヲ有スルモノガアル、此ノ場合ニ核共ニ健全ナモノ、時ニハ一核ガ車輪狀ノ可染質排列ヲ失ヒ、進シデハ核崩壞ヲ起セルモノ、二核共ニ變性ニ陥レルモノ等ガアル、此等ノ時細胞ハ尋常ノ大サノ時アルモ、稍々又ハ頗ル大ナル時ガアル。而シテ之等ノ多核「ブ」細胞ガ特ニ血管周圍ニ著シトハ認メラレヌ。定型のノ一核ヲ保有シテ細胞體ガ多角形、更ニ圓柱狀、紡錘狀等種々ナル形態ヲ呈スルモノガアル、又膨大セル細胞體内ニ圓形ノ空胞ヲ生ジ、核ハ正常ナルカ或ハ邊緣ニ壓排セラレ更ニ定型の造構ヲ失フモノモアル。細胞體内ニ大小種々ナル程度ニ嗜酸性圓形ノ顆粒ノ一個又ハ數個ヲ包藏スルモノガアル。此ノ際核ノ定型ヲ失ヒ、顆粒増大シテ細胞體ノ大部ヲ滿ス時ハ之ガ果シテ「ブ」細胞ナリヤ否ヤ鑑別ニ困難ヲ感ズルニ到ルノデアアル。之等ハ「ブ」細胞ノ硝子樣變性ト目スベキモノデアツテ次項ニ述ベントスルルッセル氏小體ノ成因ニ至大ノ關係ヲ有スルモノデアアル。

「エオジン」嗜好細胞、中性多核白血球、肥肝細胞、組織球等モ鼻粘膜ニ屢々發現スル所デアアル。就中「エ」細胞ハ表在性ニ多數集(合セルヲ觀ル事ガアル、殊ニ病的肥大下甲介ニ多ク見ルノハ、恐ク切除前ニ加ヘラレタル種々ナル藥液ノ塗布、其他機械的ノ刺激ニ因ルモノニ非ザル歟。多核白血球ハ一般ニ少數ヲ認メ得ルニ過ギヌガ、鼻茸及ビ下鼻道壁ノ數例ニ於テハ可成ニ多數ガ集簇セルノヲ見タ。組織球(清野、Aschoff)モ各組織ニ散在性ニ認メラレル、特ニ上顎質粘膜ニ次デハ下甲介ニ多ク、噬喰機能ヲ擅ニセルヲ往々窺ヒ得ル。肥肝細胞ハ比較的深部結締組織中ニ少數ヲ認メルニ過ギヌ。

ルッセル氏小體ニ就テ

ルッセル氏小體(ルッセルト記ス方或ハ可ナランモ暫ク舊套ヲ追フ)ニ就テ、Fick (19) Miller (20) 楠 (21) 等ノ定義スル所ヲ綜括シテ、次ノ如キ物質ヲ理解スル、即チ球形ニ通常デハアルガ時ニ卵圓形ヲナシ、又ハ稍々不正ノ形態ヲ有スル物體デ、強い光澤ヲ放チ、劃然トシタル輪廓ガアリ、同質性デ無組織造構ヲ呈シ、一定ノ染色反應ヲ現ハスノデアアル、之ハ結締組織ノ領域内ニ在テ細胞體内ニ包囊セラレテモ、又遊離ノ狀態ニテモ發見セラレ、個々ニ散在シテ居ル場合ト或ハ數個又ハ十數個更ニ數十個集合シテ居ル場合等アル。一八九〇年 Forssell ガ始メテ癌組織中ニ之ヲ發見シテ、一種ノ分芽菌デアツテ癌腫ノ病原體トシタノデアアル、其ノ誤リデアアル事ハ明白デアアルガ、然シ之ヨリ病理學徒ノ注意ヲ惹ク所トナツタノデアアル。本小體ノ在存部位ハ健康狀態ニ於ケル鼻腔、上顎竇、口腔、胃、腸、尿道、膀胱、子宮等ノ粘膜、淋巴結節、扁桃腺、腎、腦及脊髓 (Lubarsch (22) 龜頭 (Nielsen (23) 等、更ニ病的狀態ニ於テハ、萎縮セル副腎、肺、肝 (Klien (24) 慢

性海綿體炎 (Nienus⁽³⁵⁾)、其他各種ノ炎症、腫瘍等ニ多數ノ士 (Klien⁽³⁵⁾) Sachs, Toulon, ⁽³⁵⁾ Goldmann, Seifert, Lubsch, ⁽³⁵⁾ Hansmann, ⁽³⁵⁾ Amersbach, ⁽³⁵⁾ Thorel, ⁽³⁵⁾ Saltykow, ⁽³⁵⁾ 橋渡、中村⁽³⁶⁾、渡邊⁽³⁷⁾等ニ依ツテ發見セラレタガ、餘リニ繁雜ニ渉ルヲ以テ、茲ニ掲ゲス。唯、我が鼻科領域ノモノニ就テ述ベル、鼻硬化症ニ於テ Pelizzari (1883) ガ硝子様小體トシテ記シタモノガ本小體ニ關スル第一聲デアツタノデアル、實ニ Russell ニ先立ツ事數年デアルガ惜シム可シ未ダ學界ノ注目ヲ惹クニ到ラナカツタ、次デ同症ニ於テ Cornil (1883) Alvarez (1885) Wolkowitsch (1885) Mibelli (1889) 等ノ記載ガアル。Stepanow⁽³⁸⁾ (1891) ハ肥厚セル鼻粘膜、粘液鼻茸ニ發見シ鼻硬化症ニ於ケルモノト同様ノモノトシ、鼻茸、腺様増殖症等ニ存スルハ全ク普通ノ事デアルトシタ。Stohannek⁽³⁹⁾ ハ

第 六 表

計	鼻 茸	上 顎 竇	下 鼻 道	中 隔	中 甲	肥 大 下 甲 介	下 甲 介	粘 膜 組 織 占 坐 部 位	ルツメル氏小體
1						1		上 皮 下	卅
3			2			1		腺 周 圍	
1	1							血 管 周 圍	
5	2	1	1			1		全 體	
7	1	2	2		1	2	1	上 皮 下	卅
6			3	1	1			腺 周 圍	
								血 管 周 圍	
4	2				1	1		全 體	
9	1					4	4	上 皮 下	+
6			1		2	2	1	腺 周 圍	
								血 管 周 圍	
3	1				1	1	1	全 體	
15	4	4		1	1	4	1		-
8									
60		9	9	2	6	17	9		計

嗅部粘膜ニ發見シテ、同ジク生理的狀態ニ存スルモノトシタ。Siefert ハ尋常鼻粘膜ニモ少數ハ見得ルガ、下甲介ノ軟性乳嘴腫ノ一例ニ一回、鼻茸ノ十七例ニ一回ヲ見タ。Hansmann⁽³⁵⁾ ハ鼻腔、咽喉、腸等ノ息肉ニ於テハ發見シ得ザリシト、Alagna⁽³⁵⁾ (1911) ハ前額竇炎、上顎囊腫等ニ見テ居ル。Polyák⁽³⁵⁾ ハ中、下甲介ニ檢出シ、同質性球體(homogenkugeln)トシ細胞ノ變性ニ依テ生ルモノデ膠質ニ屬スルモノトシタ、Sternberg⁽³⁵⁾ ハ鼻鼻症ノ鼻粘膜ニ多數ニ發見シテ本症ニ於テ特殊のニ認メ得ルモノトシタ。我が中村氏ハ腺様増殖症ニ於テ尤〇%ニ發見シテ居ル。最近、鷗木氏ハ口蓋扁桃腺ニ、宮城氏ハ上顎竇粘膜ニ發見シテ居ル。

余ノ研索例ニ於テ極メテ多數ニ本小體ヲ發見シタ事ハ前表中ニ各組織別ニ各例毎ニ記入シタ處デアルガ、一目瞭然タラシメル爲メニ茲ニ再
ビ其ノ占坐部位、多寡ニ從テ表示スル事トスル。(第七表)

卅ハ毎常各視野ニ於テ、又ハ視野ニ認メラズトモ他ノ多クニ於テ數個以上ヲ認メル場合。廿ハ標本ノ一切片ニ就キ一、二個ヲ見ルモノ。十ハ連續切片ヲ
通檢シテ存在ヲ證明シ得タモノ。一ハ檢出シ得ザリシモノ。陽性ノ卅ヨリ十ノ間ニ於ケル種々ナル程度、及ビ占坐部位ヲ決定スルニ確然タル區別ヲ附シ難
イノハ勿論デアル。唯、理解ニ易カラシメル爲メ類別表示シタニ止ル。

乃チ余ハ七五%ニ於テ、氏體ヲ發見シテ居ルノデアアル、尙檢出ノ陰性ニ終リシモノ、内、各部分ニ亘テ更ニ精細ナル檢索ヲ施セバ、或ハ埋
レタルヲ拾ヒ得テ此ノ陽性率ヲ増加スル事アルハ想像ニ難カラヌ、故ニ尋常ナルト炎症性ナルトヲ問ハズ、鼻粘膜ノ大多數ニ於テ、或ハ殆
ド全部ニ於テ、氏體ヲ檢出シ得ルトシテ敢テ過言ニ非ザルヲ信ズルモノデアアル。

ル氏體ノ大サハ強擴大ニ於テ甫メテ認メ得ル程度(但シ余ハ搜索ニ油浸裝置ヲ使用セヌ)ヨリ赤血球ノ十數倍ニ達スル。細胞體内ニ包囊セ
ラレタモノハ其ノ一隅ニ核ヲ認メル、此ノ可染質ガ車輪狀造構ヲ彷彿セシメテ居ル場合モアルガ、多クハ核萎縮ヲ起シテ可染造構ヲ明カニ
シ得ヌ。遊離セルモノハ、二或ハ三個一部相重ナルモノガアル、時ニハ小ナルモノガ葡萄ノ房ノ如ク、又ハ梅毒鉢ノ如ク集合配列シテ居ル場
合モアル。小體ノ周圍ニハ多少ニ拘ラズ「フラスマ」細胞ヲ見ル事普通デアアルガ、時ニハ全ク孤立シテ存在スル事ガアル。「ブ」細胞以外ノ
細胞ニ依テ圍繞セラレル事ハ殆ドナイ、稀ニ少許ノ淋巴球ヲ附近ニ散見スル事アルニ止マル。余ノ施行シタ染色法ト其ノ結果ハ次ノ如クデ
アル。「エオジン」及ビ酸「フクシン」ニ依リ鮮紅色、「メチール綠」、「ピロニン」ニテ淡紫色、ワイゲルト氏彈力纖維並ビニ纖維素染色ニ可
染、即チ「グラム」陽性、ワン、ギンソンニ帶淡紅黃色、沃度綠ニ綠色ニ染マル。尙ホ水、酒精、酸等ニ不溶デアアル。之等ハ孰レモ先人ノ企
テタ處デ、唯追試シテ誤ナカラン事ヲ期シタニ過ギヌ。

ル氏體ノ本態、原基並ビニ發生機轉等ニ關シテハ實ニ幾多ノ業績ガアツテ、甲論乙駁、徒ラニ喧囂ヲ極メテ居ル。之等ニ就テハ既ニ楠、
渡邊、中村、黒田氏等ノ詳細介紹、批判ガアルノデ、茲ニハ簡略スル。Klien (1892) ハ先ツ Russell ノ病原説ニ反旗ヲ翻シ、脂肪同化
作用ニテ増大シタルトマン顆粒トシタ。Touton (67) (1893) Hansenmann (69) 中村氏 (35) 等ハ結締組織細胞ヨリ生ズトシ、Nielsen (37)
Lubarsch (37) (38) Krompecher (39) Konstantinowitsch (39) 等ハ肥胖細胞、遊走細胞、内被細胞等ヨリ生ズトシ、Ledermann (39) 〃「リ」
細胞ヨリ、Chuma (3) (中馬) 〃「リ」細胞ト「ブ」細胞トモリ、Salukow (66) Konstantinowitsch (67) Fick (67) 楠、渡邊、氏等ハ赤血
球ニ關係アリトシ、Unna (39) (39) Pelagatti (63) Marschalkow (67) Schridde (67) Fabian (67) Fick (67) Amersbach (67) Miller (67) Sternb
erg (67) 楠渡、楠 (36) 等ハ「ブ」細胞ヨリ發生ストシ大勢ハ略ボ「ブ」細胞説ニ決セラレタル感ガアルガ、黒田氏 (34) ハ「ブ」細胞ノ存在セザル

副腎髓質中ニ發見シテ副腎髓質細胞ヨリ生ズトシ、Müller (36) (1920) ハ亦肉腫細胞中ニ多數ヲ發見シテ肉腫ル氏體ト命名シタ。之等ノ業績ハ何レモル氏體ヲ證明スベキ種々ナル操作ヲ行ツタモノデアル、故ニ之ヲ直チニ否定シ去ル事ハ出來ナイ。茲ニ到ツテル氏體ナルモノ、成因ハ多元的ナルモノデアルト云ハザルヲ得ナキガ如クデアル。

余ノ檢索セル鼻腔粘膜中ニ發見スルル氏體ハ、其ノ周圍ニ多數ノ「ブ」細胞ヲ認メル事、「ブ」細胞體内ニ小ナル又ハ不定型的ナルル氏體ヲ認メル事、他ノ特定スベキ細胞ヲ此ノ周圍ニ見ナイ事等ニ依テ「ブ」細胞ニ由來スルモノト考ヘル。友人大藤博士ハ家兔睾丸ニ實驗的ニ「ブ」細胞浸襲症ヲ起サシメタガ、遂ニル氏體ヲ生成スルニ到ラナカツタノハ、余ノ親シク標本ヲ閲覽シテ確證スル處デアル、故ニ「ブ」細胞ノ在ル所、直チニル氏體之ニ伴フト云フモノデ無ク、是ガ發生ニハ種々ナル要約ヲ必要トスル事ヲ知ルノデアル。即チ余ノ鼻粘膜ニ於ケル所見ヨリ考察スル時ハ、慢性ノ經過ヲ探ル炎症、持續スル鬱血等ハ之ガ發生ヲ容易ナラシメルモノト推斷サレルノデアル。

斷 案

一、鼻粘膜上皮内ニ見ラレルト謂フ變性空隙ハ余ノ研索例ニ於テモ之ヲ認メタ、Opplhofer, Glas ノ云フ如ク、上皮細胞ノ壞死セルモノニ白血球等ノ遊出、附加セルモノデアル。

二、上皮内腺モ亦屢々遭遇スル所デアル。之レハ機能亢進セル杯狀細胞ノ集合セルモノト見ルベク、Engelke ノ如ク保護裝置ナリト考ヘラレズ、又 Conder ノ云フ如キ腺管開口部ニ非ザルハ、連續切片ニ依テ之ノ存スル部ニ排泄管ヲ證明セザルニ依リ明カデアル。

三、肥厚性鼻炎ニ特異ナリトシテ擧ゲ得ル組織像ハ見出し得ナイ、基底膜ハ Chatellier ノ云フ如ク肥厚セルモノ、ミニ見ルモノデ無ク、固有粘膜層ノ彈力纖維ハ Kopetsky ノ主張ト相反シテ尋常ノモノニモ明カニ認メ得ル。

四、肥厚性鼻炎ニ於テハ往々甲介骨ニ新生ヲ觀ル。從テ此ノ際骨組織ハ關與スルモノニ非ズト云フ Citelli ノ説ハ誤リデアル。加之、尋常トセラレルモノニ於テモ亦骨組織ノ肥厚ヲ見ル。

五、甲介骨ハ不斷ニ旺盛ナル骨質ノ添加、吸收ヲ營ミツ、アルハ Schumacher ノ云フ如クデアル。

六、成人鼻腔粘膜ニ於テ、其ノ生理的タルト病的タルヲ問ハズ、殆ド凡テノ例ニル氏小體ヲ檢出シ得ルモノデアル。尙下鼻道及ビ中隔粘膜ニ於テハ余ノ檢出セルヲ以テ嚆矢トスル。

七、鼻粘膜ニ發見スルル氏小體ハ「プラスミ」細胞ニ由來スルモノト考ヘル、尙之ガ成因ヲ幫助スルモノトシテ持續スル鬱血、反復スル炎症等ヲ擧ゲ得ル。

ハ、*Sten*氏小體ノ存在ハ病理組織のニ特殊ノ意義ヲ有スルモノデ無イ。從テ鑑別診斷ノ資トスル (*Sten*berg) ニ足ラズ。

結 語

余ノ檢索セルハ僅カニ六十例、數ニ於テ多イト云ヒ難ク、部位ハ固有鼻腔ニテハ中、下甲介、下鼻道側壁及ビ中隔ニ止マリ、副鼻腔ニテハ上顎竇ノミニ過ギス。素ヨリ之ヲ以テ足レリトハ毫モ思惟スルモノデ無イ、併シ是ニ依テ鼻腔全班ノ概約ノ所見ヲ補足スルニ敢テ大過ナカラシムルヲ考フルノデアル。以上ニ據テ多少ノ新知見ヲ加ヘ得タルニ非ザルカト想ヒ茲ニ錄セル次第デアル。

(本報告ノ一部ハ第三回北海道醫學會總會ニ、一部ハ第三十回大日本耳鼻喉科會總會ニ於テ發表シタモノデアル)

筆ヲ擲クニ臨ミ吾宗我部教授ノ御指導御校閲ヲ賜ハリシニ衷心ノ感謝ヲ捧ゲ、教室員諸兄ノ御助力ヲ謝スル。昭和三年四月二十五日夜

附 圖 解 說

- 第一圖 上皮内癌性空腔 *Zeiss*. Ob. 16 mm. × Ok. K. 6. Balgl. 50. cm.
第二圖 甲介骨ニ於ケル新生骨組織 Ob. 16 mm. × Ok. K. 4. Balgl. 40. cm.
第三圖 甲介ノ腐狀吸收 do
第四圖 上顎竇粘膜ニ於ケル *Sten*氏小體 Ob. 4 mm. × Ok. Komp. 6. Balgl. 38. cm.

文 獻

- 1) 西原、鼻甲介ノ病理解剖、愛知醫學、第55卷、4號、2) *Alingus*, Die Plasmazellen bei Ohrenkrank. Vir. Arch. Bd. 204. 3) *Auersbach*, Histologie d. Sinusitis. Zieg. Beitr. Bd. 40. 4) *Boeninghaus*, Schleimdrüsen im hypert. Nasensch. Arch. f. L. Bd. 3. 5) *Brunn*, mikrosk. Anat. d. mensch. Nasenhöhle. Arch. f. mik. Anat. Bd. 39. 6) *Citelli*, Intraceph. Schleimdrüsen. Zentr. f. L. Jg. 18. 7) *Derselbe*, Path. Anat. d. hypert. Muschel. Arch. f. L. Bd. 13. 8) *Chunna*, Histologie d. Mägenschleimh. Vir. Arch. Bd. 247. 9) *Cordes*, Metamorph. d. Drüsenst. Arch. f. L. Bd. 10. 10) *Kawano*, Entsteh. d. Russell in Plasmaz. Zentr. f. Path. Bd. 18. 11) *Fick*, Russell'sche Körperchen. Vir. Arch. Bd. 193. 12) *Glass*, Intraceph. Drüsen. Arch. f. L. Bd. 16. 13) *Goerke*, Path. Anat. d. Nase. Ibid. Bd. 19. 14) *Hausenmann*, Hyaline Zellen in Magenpolyp. Vir. Arch. Bd. 148. 15) *Hajek*, Intraceph. Drüsen d. Nasensch. Arch. f. L. Bd. 17. 16) *Derselbe*, Nebenhöhle der Nase. 1933. 17) *Klitten*, Russell'sche Körperchen u. Altmanngranul. Zieg. Beitr. Bd. 11. 18) *Kopetzky*, Elastica in hypert. Nasensch. Arch. f. L. Bd. 16. 19) *Konstantinowitsch*, Entsteh. d. Hyalinkörp. Vir. Arch. Bd. 167. 20) *Krompecher*, Plasmazellen. Zieg. Beitr. Bd. 24. 21) *Kudo*, Histologie d. Nasensch. Arch. f. L. Bd. 19. 22) *Derselbe*, normale Zustand d. Nasensch. ibid. 23) *Derselbe*, laparige Hypertrophie. Ibid. 24) 黒田、副腎ノ硝子糖小體、東京醫學、第25卷、1號、25) 橋、フラスコ細胞、ルツェル氏小體、東京醫學、第26卷、8-9號、東京醫學、26) *Lederhann*, Deutsche Dermat. Kongr. 1895. 27) *Lubarsch*, Albuminosen

- Degenert. Ergbn. d. allg. Path. Abt. 2. 28) **Derselbe**, Verhand. deutsch. path. Gesell. 1908. 29) **Mannase**, Path. Anat. d. Nebenhohle. Zeit. f. II. Path. 4. 30) **Marschanke**, Plasmazell. in Rhinoskl. Arch. f. Derm. Bd. 8. 31) **Mithell**, Histologie d. Rhinoskl. M. f. pract. Derm. Bd. 8. 32) **Müller**, Russell-Körp. im weib. Genit. Vir. Arch. Bd. 109. 33) **宮城**, 副鼻腔粘膜ノ石灰沈着. 福岡醫科. 第21卷. 3號. 34) **Müller**, (venöse d. Russell. Körp. Frank. Z. f. Path. Bd. 23. 35) **中村**, 腺癌増殖症ノル氏小體. 東京醫學. 第28卷. 3號. 36) **Nichols**, Path. d. Carcinom chro. Vir. Arch. Bd. 118. 37) **Nishimura**, Entz. Erkrank. d. Kieferh. Denk. Kahl. Handb. Bd. 2. 38) **Okada**, Pathologie d. Schleimpolyp. Arch. f. L. Bd. 7. 39) **小比木**, 敗血症鼻茸. 耳鼻會報. 40) **Oppikofer**, Anat. d. Nase. u. Nebenhohle. Arch. f. L. Bd. 19. 41) **Derselbe**, Mikrosk. Unters. d. eiternd. Nebenh. Arch. f. L. Bd. 21. 42) **Paul**, Hyalin u. Kollloid. Vir. Arch. Bd. 130. 43) **Reinhardt**, Blastomyceten u. hyalin Pegen. Vir. Arch. Bd. 150. 44) **Polyak**, Path. Histol. d. hypert. Nasensch. Arch. f. L. Bd. 6. 45) **Rugani**, Schleimhaut d. Nase. Zeit. f. O. Bd. 2. 46) **Saltykow**, Entsteh. d. hyal. Körp. Vrch. deutsch. path. (tesel. 1908. 47) **Schaffer**, Drüsen d. vasa eff. b. Mensch. Anat. Anz. Bd. 7. 48) **Schiffertederer**, Histol. d. Nasensch. Hyman's Handb. Bd. 3. 49) **Derselbe**, Bau d. Schleimdrüsen. Arch. f. mik. Anat. Bd. 23. 50) **Schminke**, Drüse d. menschl. regio respirat. ibid. Bd. 61. 51) **Schmitt**, Histolog. d. Rhinoskl. Arch. f. Derm. Bd. 73. 52) **Schunacher**, Histolog. d. Luftwege. Denk. Kahl. Handb. Bd. 1. 53) **Stepanow**, hyalin. Kugel in Schleimpolyp. M. f. O. Jg. 25. 54) **Sternberg**, Histolog. d. Ozaia. Zeit. f. H. Bd. 4. 55) **Stuchanuch**, Merkmal d. mensch. Riechepith. Zeit. f. O. Bd. 22. 56) **Thorel**, hyal. Körp. d. Magen u. Darnschl. Vir. Arch. Bd. 151. 57) **Toutou**, Russell u. Goldmann's Kugel. Vir. Arch. Bd. 132. 58) **Umm**, Hyalin u. Kollloid im Haut. M. f. pract. Derm. Bd. 19. 59) **Derselbe**, Herkanth d. Plasmazillen. Vir. Arch. Bd. 214. 60) **Vogel**, Krankh. d. Luftwege. Denk. Kahl. Handb. Bd. 2. 61) **渡邊**, 腺炎患ノル氏小體. 日本眼科. 第21卷. 12號. 62) **Zaenke**, Intraepith. Drüsen d. Nasenschl. Zeit. f. O. Bd. 45.

衣川 穰＝鼻腔粘膜ノ病理組織的知見補遺 特ニ之ニ發現スルルツセル氏小體ニ就テ

I

II

III

IV

Y. Kinugawa : Pathologisch-histologische Untersuchungen der Nasenschleimhaut mit besonderer Berücksichtigung des Vorkommens von Russell'schen Körperchen.